

森田草平の『囊』とシェストフ論争前史：『地下室 の手記』の初期の紹介と阿部六郎

池田, 和彦
明治大学

<https://doi.org/10.15017/16035>

出版情報 : Comparatio. 8, pp.26-36, 2004-06-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

森田草平の『霧』とシェストフ論争前史

——『地下室の手記』の初期の紹介と阿部六郎——

池田和彦

ドストエフスキイの『地下室の手記』が現代文学の始原の一つに位置付けられ、この作品の画期的性格を喧伝したシェストフの『悲劇の哲学』を介して、昭和文学に大きな影響を与えたことはつとに知られている。本稿はシェストフ論争に至るまでの『地下室の手記』の初期の紹介について、森田草平の翻案『霧』を中心に概観し、ついで『悲劇の哲学』の翻訳者阿部六郎がこの翻訳を行った背景について述べる。また、あわせてもう一人の共訳者河上徹太郎がシェストフの流行をどのように見ていたか、簡単に紹介したい。

(一)『地下室の手記』の初期の紹介

1864年雑誌『世紀』に発表された『地下室の手記』は、発表当時ほとんど反響がなく、この状態は世紀末に至るまで変わらなかった。ロシアにおけるドストエフスキイの再評価は1890年代前半に始まるが、『地下室の手記』の重要性に目を開かせたのは、1900年から翌年にかけて書かれたシェストフの『ドストエフスキイとニーチェ——悲劇の哲学』を嚆矢とする。1902年にディアギレフの編集した『芸術の世界』誌に連載され、1903年1月に出版されて反響を呼んだ。

『地下室の手記』の西欧での翻訳は1886年の仏語訳がもっとも早く、次いで1895年に独語訳が出ている。ただし、仏語訳は『地下室の手記』の主に第二部と別の短編「女主人」を合体させて「地下の精神」と題する一つの物語とした脚色訳で、独語訳も第二部の一部だけのかなり自由な翻訳だった。完訳が出るのは20世紀に入ってからで、1907年の独訳、1909年の仏訳、1913年の英訳の順となる。ニーチェが1886年の仏語訳を読んで、いち早く注目したエピソードはよく知られているが、西欧でこの作品の重要性が広く知られるようになったのは、A.ジッドの「ドストエフスキイ論」(1923)からのことだった。¹

日本におけるドストエフスキイの翻訳紹介は、1892年(明治25年)の内田魯庵による『罪と罰』の翻訳に始まる。英語からの重訳による全体の三分の一ほどの訳で、北村透谷をはじめとして多くの書評がでたものの、ごく限られた文学者のあいだで注目されに止まった。明治時代には、これを除けばドストエフスキイの初期の短編の断片的な翻訳が中心で、しかも大半が英語からの重訳だった。『浮雲』や『破戒』など一部の作品に影響を与えはしたが、本格的な紹介からはほど遠い状態だった。²

このような状態からの転機となったのが、1914年(大正3年)新潮社から出版された『虐げられた人々』(昇曙夢訳、近代名著文庫)、『白痴』(米川正夫訳、新潮文庫)、『罪と罰』(中村白葉訳、新潮文庫)らの翻訳だった。西欧の名著の普及を図って小型本で出されたこれらの翻訳は、いずれもロシア語

¹ ジッド以前では、M.マリの『ドストエフスキイ』(1916)が『地下室の手記』に一章を設けこの作品に注目している。

² 明治期のドストエフスキイの翻訳紹介については、『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》45 ドストエフスキイ集』、大空社、1998を参照。

からの読むに耐える完訳で、ドストエフスキイが一般の読者に読まれるようになるのに貢献した。新潮社は続いて1917年から1921年にかけて、全11巻16冊の日本で最初の『ドストエフスキイ全集』を出版する。これは実質的には作品集であったが、『未成年』が前半だけの部分訳に止まったのを除けば、『地下室の手記』の初訳(永島直昭訳)を含む主要作品すべてが収められており、近代日本文学に及ぼした影響については高く評価されている。³米川正夫を中心とするこの全集によって、ドストエフスキイが広範な読者に迎えられる素地が築かれ、これを背景に大正中期、日本におけるドストエフスキイ流行の第一期を迎えることになる。

『地下室の手記』の日本での初訳は、このように1920年11月新潮社版『ドストエフスキイ』全集第8巻にこの題名で収録されたものだった。ロシア語からの翻訳だったが、まだ重要視されていなかったことを反映して、『二重人格』の付録扱いされている。また、翻訳にも問題があった。訳者自身序文で、「自分はこれを原書とガーネットの英訳を対照して訳した。自分の不徹底な露語の力ではさうするより仕方なかったからである」、と書いているように、⁴生硬、難解な翻訳で、とくに第一部でそれが著しく、読者が文学作品として味わえるような域に達していなかった。参考に作品の始めの方からその一例を示せば次のようなものである。

けれどもそれは、この冷たい忌はしい半絶望半信仰の中に於いて丁度いゝのである。その中へ意識的に身を埋めて悲しみと共に生存してゐる。この鋭く認識された、そしてまだ幾分か疑はしい己の立場に於いて、この内側へ向けられた満足させられない欲望の地獄に於いて、この苦しみの動乱、永遠に決定された解決、而も一瞬の後再びなされる後悔——私の言つた奇妙な香の高い歓喜等の中に於いて生存してゐるのである。それは、非常に微妙で非常に分解が困難であるから、ほんの少ししか束縛されてゐない人か、又は単に神経の強だけの人と雖もその単原子を了解しない程である。(第一部第三節)⁵

『地下室の手記』の第一部はドストエフスキイの小説の文章のなかでは比較的難しい部類に属し、初訳者として特別の苦勞があったと思われるが、極端な例とはいえ、ドストエフスキイの提起した文明批判を受けとめられるような翻訳でなかったことが推察できよう。その後大正末から昭和10年前後に出版された三宅賢(春秋社版『ドストエフスキイ全集』第4巻、1925)、伊吹山次郎(春陽堂文庫、1934)、米川正夫(三笠書房版『ドストエフスキイ』全集第13巻、1937)等による翻訳によって、はじめてこの作品が一般の読者に受け入れられる土壌が用意されたのである。⁶

試みに先の引用と同じ部分を三宅訳で示せば以下の通りである。

……けれども此の冷酷な、不快極まる半絶望、半信念の中に、悲しみの結果意識的に己れ自身を生き埋めにしたといふ事の中に、四十ヶ年の地下室蟄居の中に、自分の境遇からの逃道はないと吾と自ら強いて考へたものゝ、其れが頗る疑はしいことの中に、身内に迄喰ひ込んだ満たされない欲望の此の毒々しさの中に、躊躇や逡巡や、断乎と定めた決心や、次の瞬間に又もや到来する後悔やの此の

³木寺黎次『ドストエフスキイ文献考』、三笠書房、1939、19頁。

⁴『ドストエフスキイ全集』第8巻、新潮社、1920、302頁。本稿の引用にあたっては、漢字は新字体を用い、ふり仮名は省略する。

⁵同上、318頁。

⁶1934-5年に刊行された最初の三笠書房版『ドストエフスキイ全集』第12巻には、三宅賢訳の『地下室の手記』が収録されている。

猛烈な熱病の中に——実に此れ等の中に、私が今語つたところの不可思議な愉楽の真髓が宿されてゐるのだ。⁷

まだ、平易な訳とまではいえないが、原文に忠実な十分理解できる訳文になっている。⁸三宅は早稲田大学露文科の第一回の卒業生であったが、米川正夫、中村白葉ら東京外語学校出身の翻訳者以外にもロシア文学の翻訳者の裾野が広がってきたことがうかがえる。

大正時代日本でよく読まれたメレシコフスキイの『人及芸術家としてのトルストイ並にドストイエフスキー』（森田草平、阿部能成訳、1914）は、シェストフの『悲劇の哲学』の少し前、同じ『芸術の世界』誌に連載された評論の部分訳だった。ほとんど同じころ出版されてロシアで好評だったにもかかわらず、日本での『悲劇の哲学』の紹介が20年遅れたのも、シェストフとメレシコフスキイとの知名度の差だけでなく、『地下室の手記』の普及の遅れや大正初期と昭和10年前後の社会的な背景の違い、ドストエフスキー理解の差に由来していた。

（二）森田草平の翻案『霧』

こうしたなかで特筆されるのは、森田草平がドストエフスキーの本格的な紹介が始まったばかりの1915年、『霧』と題する『地下室の手記』を下敷きにした翻案小説を書いていることである（『新小説』大正4年9月号）。森田が大正時代、初期のドストエフスキー紹介に積極的な役割をはたし、漱石にドストエフスキーを推奨して読ませたりしたことはよく知られている。しかし、彼が『霧』で『地下室の手記』の紹介にも先駆的な役割を演じたことは、今日にいたるまであまり知られていない。

森田が馬場胡蝶の紹介を機にツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイらのロシア文学に親しむようになったのは、東京帝国大学英文科の学生であった1903年（明治36年）頃からという。⁹そして、『霧』の書かれた1915年当時は、彼のドストエフスキー受容のピークにあたっていて、¹⁰前年に『人及芸術家としてのトルストイ並にドストイエフスキー』を、この年には『悪霊』や『悪霊』を基にした『決闘』『妻の帰宅』『産婦』を翻訳あるいは翻案し（後者二つは翻案）、ドストエフスキー関係の文章をいくつか新聞、雑誌に寄稿している。

では森田が『地下室の手記』に注目するようになったのは、どういう経緯からだったろうか。この点については、『霧』が発表される七ヶ月ほど前、読売新聞に載せられた「ドストイエフスキーの一面」（大正4年1月30日）が参考になる。これはドストエフスキーの死後34回目の命日にちなんで、その命日

⁷ 『地下室の記録』（三宅賢訳）、『ドストエフスキー全集』第4巻、春秋社、1925、242-3頁。

⁸ 原文は以下のとおり。

《Но именно вот в этом холодном, омерзительном полуотчаянии, полувере, в этом сознательном погребении самого себя заживо с горя, в подполье на сорок лет, в этой усиленно создонной и все-таки отчасти сомнительной безвыходности своего положения, во всем этом яде неудовлетворенных желаний, вошедших внутрь, во всей этой лихорадке колебаний, принятых навеки решений и через минуту опять наступающих раскаяний—и закладывается сок того странного наслаждения, о котором я говорил.》（Ф. М. Достоевский, *Полн. собр. соч.*, т.5, Л., 1973, с.105.）

以下、このドストエフスキー全集第5巻からの引用は、本文中に（D・頁数）で示す。

⁹ 「自叙小伝」、『明治大正文学全集』第29巻、春陽堂、1927、1-2頁。森田草平におけるドストエフスキーの受容については、清水孝純「草平・漱石におけるドストエフスキーの受容」、成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』所収、明治書院、1967、参照。

¹⁰ 根岸正純『森田草平の文学』、桜楓社、1976、149頁。森田草平の文学活動に関してはもっぱら同書に負っている。

と翌日の二回にわたり連載された記事の一つで、当時ドストエフスキへの関心が一般にも広がり始めていたことを示している。このなかで森田は、ドストエフスキが好きで二三の作品は精読したものに語るようなことは持っておらず、翻訳したメレシコフスキの研究に満足しているので、それを借りてドストエフスキの一面を紹介する、と述べて『地下室の手記』にふれて次のように書いている。

「大都会の暗い片隅より」は神秘的、瞑想的なもので、其主人公はドストエフスキ自身に最も近い一人だと云ふことだ。其主人公の自白にはトルストイの「我懺悔」にも劣らぬ、峻厳な、仮借する所のない宗教的煩悶と疑惑、殊に性欲に対する忌憚なき自白と、自己鞭撻があるさうなが(原文のまま一引用者)、自分は昨夕漸つと其書を手に入れたばかりだから、此処に紹介することが出来ないのを遺憾とする。

メレシコフスキの「彼の小説の主人公中ドストエフスキの心に最も近い一人」による峻厳な告白の書、¹¹という言葉が森田の関心をよぶ材料になったこと、まだじっさいには読んでいず、この頃初めて本を入手したことがわかる。森田は当時『悪霊』の翻訳にあたっていて、その7月の出版に続き9月に『霧』を発表していることから、精力的にこの翻案に取り組んだことが推測できる。

では『霧』はどんな内容の翻案だったか。

『霧』は『地下室の手記』第二部のあらましを小石川に逼塞する統計局の小役人の回想の形式にした62頁ほどの中編小説で、原作の娼婦リーザを浜町の女郎おげんに、寄宿学校時代の友人たちを大学時代の友人に、召使のアポロンを女中の婆やにそれぞれ移し変えたものである。その冒頭を示せば次のとおりで、翻訳臭さは残るが先に引用した翻訳に比べ読みやすい文章になっている。

私は其時三十に成つて居た。それ迄といふもの、私は不規則で光彩のない、謂はゞ野蛮人のやうに孤独な生活を送つて居た。友達もなければ、知人もない、だんだん自分一個の中に閉籠つて、自宅にばかり引込んで暮らした。役所へ出ても、同じやうな眼で自分の周囲を眺めて居た。同僚も私を変わり者と思ふばかりでなく、随分可厭な奴だと思つて居たらしい。私はそれを意識して居た。(121頁)¹²

冒頭、原作では二四才の主人公が三〇才になっているのは、初の英訳であった Everyman's library 版の *Letters from the Underworld* (C. J. Hogarth 訳、初版 1913 年) に拠ったものとみられる。¹³ 森田は『霧』の末尾に「原作はフォードル、ドストエフスキの『大都会の暗い片隅より』である」、と 1895 年のドイツ語訳の題 *Aus dem dunkelsten Winkel der Großstadt* を用いて断っているため、独訳から訳したと推測されることがある。しかし、1895 年の翻訳は『地下室の手記』第二部第六節以下だけの部分訳で、引用した一節は含まれていない。また、1907 年に出版されたドイツ語版ドストエフスキ全集第 20 巻の翻訳(題名 *Aus dem Dunkel der Großstadt*) では原作どおり 24 歳になっていて、ドイツ語訳をテキストとした可能性は少ない。¹⁴ 上記の題を用いたのは、英訳の題が翻案の内容とそぐわないため、『人及

¹¹ 『人及芸術家としてのトルストイ並にドストエフスキ』、玄黄社、1914、255 頁。

¹² 『霧』からの引用頁は本文中に示す。

¹³ 日本でもよく読まれたコンスタン・ガーネットによる『地下室の手記』の翻訳は、当時まだ出版されていなかった。

¹⁴ F. M. Dostojewski, *Sämtliche Werke*, 20. Bd., München, 1907, 2. Aufl., 1925, S.53.

さらに 1897 年 *Das Magazin für Literatur* 誌に載せられた「逆説家の手記」という独訳がある。これには第二部第一節は含まれているが、森田が訳した部分で訳されていないところがあり、利用された可

芸術家としてのトルストイ並にドストイエフスキー』（『トルストイとドストイエフスキー』）で使われた「大都会の暗い片隅から」という題に倣ったものと考えられる。¹⁵この部分の英訳を示せば以下のとおりで、森田が原文の語順をなぞるように逐語訳した部分のあることがわかる。

I was the thirty years old, and, so far, had lived a dull, ill-regulated existence that was wellnigh as solitary as that of a savage. I had no friends or intimates, and was gradually coming to confine myself more and more to my lodgings. In the same way, when working in my office, I never even looked at those around me, for I knew that my colleagues not only regarded me as an eccentric, but also felt for me a distinct distaste.¹⁶

英訳での改変が『霧』にそのまま踏襲されている例は他にも見られる。たとえば、先に引用した一節の少し後には、「左様だ、私は其奴等を軽蔑しながら、其奴等の方が自分よりも上等な人間だと考へるやうなことも有った。実際、現代の人間、少なくとも教養ある現代の人間といふものは、無限の自己肯定と自己否定との間に代る代る捕はれないで、単に傲慢であることは有り得ないのだ。」(122 頁)という一節がある。原作では二つの文の間に「私にはその頃それがどうしてか突然起きるのだった。軽蔑したり、崇めたり。」(D-125)という一文があって、1907年の独語訳では訳出されている。これに対し英訳では同じ一文が省略されていて、¹⁷ここでも森田が英訳に拠っていたことがわかる。

また、『霧』の結びは、「あの時受けた心の動揺から、一箇月余り寝着いて枕が上らなかつた」(一八二頁)、とおげんとの出来事の「動揺」から病に落ちたことになっている。これも英訳の“agitation”を受け継いだもので、¹⁸原作では漠然と“тоска”（愁い）のためにほとんど病気になりそうになったに止まる。(D-178)英訳のほか独語訳を参考にした可能性を完全に否定することはできないが、¹⁹もっぱらテキストとして利用したのがホガースによる英訳であったことは確実である。

それでは翻案された『霧』は原作と比べてどのような性格の作品になっただろうか。

内容的には原作にある主要な出来事の大半が取り入れられ、文学作品として味わうにたるこなれた語り口の物語になっている。とくに大学時代の友人の送別会のエピソードやおげんとの交渉を語った部分などは、原作の趣を多少なりとも伝えている。しかし一方、『霧』の表題に見られるように作品の中核をなす「地下室」「床下」のイメージが抜け落ち、第一部が省略されたため水晶宮や進歩主義をめぐる文明批判がなくなり、さらには手記の体裁が失われている点は、原作と大きく異なっている。それらの重

能性は少ない。『地下室の手記』のドイツ語訳については、

V. В. Дукин, Достоевский в немецкой критике (1882–1925), в кн. *Достоевский в зарубежных литературах*, Ленинград, 1978, сс. 184–5. 参照。

¹⁵ 『人及芸術家としてのトルストイ並にドストイエフスキー』172頁。『ある大都会の暗い片隅の想ひ出』(255頁)、『ある大都の暗き片隅の想ひ出』(264頁)とも訳されていて、統一されていない。なお、森田は序文で英訳がひどかったので独語訳からこの本を訳した、と述べている。(同書5頁。)

¹⁶ F. M. Dostoevsky, *Letters from the Underworld*, tr. by C. J. Hogarth, London, 1913, 1915, p. 49.

¹⁷ Ibid., p. 50.

¹⁸ Ibid., p. 147. 該当部分の英訳は《the agitation which I had suffered brought me near to being seriously ill.》。

1907年の独語訳では、《obgleich ich damals vor Leid fast krank wurde.》(S. 167)。また、1895年の独語訳では、《trotzdem ich selbst vor Sehnsucht beinahe krank wurde.》(Fedor Dostojewski, *Aus dem dunkelsten Winkel der Großstadt*, Berlin, 1895, 2. Aufl., 1904, S. 104.)。

¹⁹ 英文学専攻の森田がドイツ語でも西欧文学を読んでいたことについては、「我が外国文学への道」、森田草平『私の共産主義』所収、新星社、1948、103–105頁参照。

要性を森田が認識していなかったのか、たんに掲載枚数の都合などのためか定かでないが、結果的に主人公とおげんとの淡い恋物語に矮小化されているのである。

原作と大きく異なる点をさらにいくつか挙げれば、ロシアのロマンチストの現実感覚をかね備えた「多面性」(D-127)を皮肉った冒頭近くの部分が省略され、同時に主人公の「私」が「そのころ自分の心に地下室をかかえていた」(D-128)と、語った部分がなくなっている。この「地下室」「床下」のイメージの欠落は、おげんに語り聞かせる棺桶に入れられて墓場に運ばれる女郎のエピソードにも見られ、女の生前最後に落ち込んだ「地階」(D-153)も、じくじくと水のたまる墓穴も現れてこない。(147—48頁)²⁰

また、球戯場の入り口で背の高い紳士に突き退けられて長い間復讐の機会をうかがうエピソードにおいても、文学的決闘を夢想する主人公の擬似ロマン主義的思考や行動様式を語った部分が大幅に簡略化され、行為の荒筋だけ語られるにとどまっている。²¹

さらに、寄宿学校時代の友人を大学時代の友人に変更したため、主人公が少年時代をすごした徒刑囚のような寄宿学校での孤立した生活の記述がなくなり、なぜ現在の主人公のような孤独でひがみっぽい人間が生まれたのか、不明になっている。また、おげんに語って聞かせる先述の女郎のエピソードや父娘の織りなす幸福な家庭像、女郎の死と二重写しになるおげんの悲惨な未来像らについての執拗で詳細、劇的な語り口が簡略化され平板になっているため、彼女がひどく衝撃を受けるのが少し不自然になっている。そして小説の最後でも、地下室の男が手記を綴っている現在に立ちかえり、地下室で養われた虚栄と敵意からそれまで手記を書いてきた徒勞を語った部分が省略されて、「生きた生活」(D-178)から遊離した現代人の生活に対する批判がなくなっている。

総じて主人公の過去の来歴や現在の心境あるいは同時代の社会や文明とのつながりが断ち切れ、奥行きと広がりや欠いた男女の劇に収斂してしまっているのである。

一方、森田が独自の書き換えを行った、あるいは原作より詳しい叙述にした個所もある。

たとえば、外務省から南米に派遣される小林の送別会を開いた場面で、友人たちの会話の話題が「如何した加減やらジェームズやベルグソンの名前迄出た」(139頁)というのは、原作では「ついにはシェークスピアは不滅だ、というところまで話が行った」(D-147)で、漱石などもウィリアム・ジェームズやベルクソンを読んだ森田の周囲の知的状況を反映させている。

また、その後友人たちの後を追って両国橋へ人力車をやりながら、やはり止そうかと逡巡する場面は、次のように書かれている。

私は自分で描いた創造の情緒の下に殆ど泣かうとした。が、其間始終自分のして居ることが、何処か小説めいた、特にドストイェフスキの小説めいた気がして居た。(中略)宛として、『カラマゾフの兄弟』の中のミーチャヤではないか。私は急に恥ずかしくて耐らないやうな気がした。(142頁)

主人公の行為をドミトリイ・カラマゾフになぞらえたところには、森田のユーモアと同時に主人公に対する批評も含まれていたと考えられる。森田はのちの自伝的小説『輪廻』(1925)でも主人公の名

²⁰ 「地下室」「床下」のイメージがかりうじて出てくるのは、「私」がおげんに饒舌に話して聞かせるのを、「長い間、穴の中で一人で考へて居たのが、一時に迸り出るやうな気がした」(151頁)と述べている部分だけである。森田が小説の原題を知らず、このイメージの重要性に気づいていなかったことが考えられる。

²¹ 同様に第二節の始め、放蕩生活から足を洗った主人公は三ヵ月ほど家にひきこもり夢にふけてすごしたが、その夢の内容を書いた部分が省略されたため、作品の重要なテーマの一つである「美にして崇高なもの」をめぐる主人公の独白がなく、主人公の擬似ロマン主義的性格がここでも反映されていない。(87—91頁)。

をミーチャにちなんで通也としており、ドミトリーに愛着があったことが推測される。

さらに、おげんと過ごした夜の翌日、彼女が貧しい自分の住まいを訪ねて来はしないか 気に病みながらたどる夕べの散歩の情景は、ペテルブルグから所を変えて次のように描かれている。

砲兵工廠の煉塀に添うて、一日の労働に疲れきつたやうな、げつそりした顔の職工どもがどやどやと街一杯に拡がって戻って来た。私は其中を縫って歩いた。平常なら左様いふ労働者に交じって歩いている時、自分と同性同種な仲間に戻つたやうな気がして、好い心持に成るのだが、今日はそれもない。で、三崎町から裏神保町、小川町の辺り迄行つて見た。私はこんな心持に成つた時、何時でも人通りの多い大通りを選んで足を向けたものだ——特に夕方飾窓に灯火の点く時分を見計つて。(163頁)

このあたりは『煤煙』の舞台にもなった森田のなじみの土地で、下線部に見られるような一文が独自に加えられて、地についた自然な夕べの情景になっている。

以上のような翻案のなかで原作の持ち味をもっともよく伝えているのは、主人公の家を訪れたおげんに、先日の夜の心情を明かし、改めて屈辱を加えて劇的な別れをとげる最後の場面である。この部分は原作でも比較的短い場面であるため、大幅な省略をする必要がなかったのも原作の趣をよくとどめている一因である。とくに去って行ったおげんの姿を雪の中で見失い、呆然と立ち尽す次の一節は、翻案ながら味わいのある一節となっている。

四辺の空気は静かで、雪は殆ど垂直に空から降って居た。最う車の轍を消す程に積つて居る。物音一つ聞えなければ、人一人通らない。街燈は薄暮れて行く夕闇の中にぼんやり点火れていた。私は二町許り駈けて行つて、一番近い街の角に立停まつた。

女は何處へ行つたらう？ 一体、俺は又何のために女の後を追掛けるのだ？ (180頁)

自分の部屋へ戻った主人公の「私」は「此佞構わないで置くのが一番好いのだ」、と胸の苦しみを紛らすために努めて想像をたくましくする。

『あの女も最後迄屈辱の記憶を胸に畳んで居た方が好いのだ。そりやア可憐しい追憶には相違なからうが、一生あの女の骨身に沁みて、あの女の魂を潔める役に立つ、少くとも、あの女の蹂躪された人間としての権威を忘れさせないだけの訳には立つ。(中略)左様だ、何んなに汚れた恐ろしい終局があつた女を待つて居るとしても、此陵辱は——相手の男に対する憎悪を通じて、あの女の魂を純化し向上せしめずには置くまい。うむ、相手の男を宥すといふ心持からも？ 結局、あの女は幸福だらうよ？』(181頁)

苦し紛れの言葉ではあるが、屈辱の記憶とそこから生まれる憎悪がおげんの魂の純化、向上に役立つだろうという逆説的な考え方は、ロマン主義的な迷妄や欺瞞を捨てて真実と直面することを説く原作の地下室の男の主張とつながりを持つ。ボードレールの散文詩「貧民を撲り倒そう！」(『パリの憂鬱』所収)を想起させるようなその辛らつて苦い認識には、愛の作家、感傷的な人道主義者という大正時代に主流だったドストエフスキイ像を超える要素があつた。しかし、森田がそれに気づいていたか定かではない。

森田の翻案の仕事には「創作上の行詰まりからの転進」の一面もあったというが、²²『霧』の場合は彼の文学的な資質と呼応する積極的な動機もあったと考えられる。すなわち、『地下室の手記』が「ドストエフスキイの一面」で紹介されたような赤裸な告白と男女の相克の劇であった点である。劣等感と虚栄心のない交ぜになった主人公の鋭敏な自我の煩悶や、リーザと男が演じる正面からのぶつかりあいは、森田が『煤煙』やのちの『輪廻』で積極的に取りあげたもので、彼自身の文学的志向と一致していた。漱石の『明暗』などに見られる隠微な男女の劇と対極的なあからさまな男女の葛藤を描いたところに『煤煙』の新しさがあったとすれば、多少バタ臭さの残る『霧』のおげんととの劇にもそれは認められ、森田の真骨頂が発揮されていたと見られるのである。彼が『地下室の手記』の文明批判の要素を切り捨てて省みなかったのも、掲載枚数の都合だけでなく彼の関心が上の二つの面にあったためと考えられる。

『霧』は標題に原作がドストエフスキイであることが書き添えられなかったためか、ドストエフスキイとの関連で注目されることはなかったようで、これまでドストエフスキイの受容史のなかで取り上げられたことがなかった。しかし、西欧文明や現代人の意識のあり方に対する批判が抜け落ちていたとはいえ、大正時代に支配的だった人道主義的なドストエフスキイ像を超える側面を含んでいたことは記憶されてよい。もとよりドストエフスキイの紹介がようやく本格化しはじめた 1915 年の時点では、一般の読者にそのような認識を求むべくもなかったが。

(三)『悲劇の哲学』と阿部六郎、河上徹太郎

日本におけるドストエフスキイ流行の第二期にあたる昭和 10 年前後の流行の一つのきっかけとなったのは、1934 年に刊行されたシェストフの『悲劇の哲学』(原題『ドストエフスキイとニーチェ』)だった。1924 年に独語訳が、1926 年に仏語訳が出されており、それらを利用して阿部六郎と河上徹太郎が共訳したものである。23原著の副題を本題にしたのは、仏語版に倣ったものらしい。シラー的なヒューマニズムや近代合理主義、進歩や理性に対する信頼ら、ドストエフスキイの青年時代の理想の崩壊を論じた書で、彼の信念更正の劇を端的に表現した作品として『地下室の手記』への注目を喚起した。シェストフが生前出版した本の中で最も版を重ね、これまで、すくなくとも八ヶ国語に翻訳されている。しかし、いわゆるシェストフ・ブーム、シェストフ論争と呼ばれるようなジャーナリスチックな現象が起こったのは、日本だけだった。

シェストフ論争についてはすでに多くの論考があるので、本稿では改めて取り上げない。ここでは『悲劇の哲学』の翻訳者阿部六郎がこの翻訳を行うに至った背景について紹介したい。

『地下室の手記』の中心的テーマには、チェルヌィシェフスキイの『何をなすべきか』への批判を意図した近代の合理主義、進歩主義、社会主義批判があり、ベリンスキイやゲルツェンのヘーゲル批判を受け継ぐ歴史的必然と個人の実存をめぐる問題があった。後者はのちに『カラマーゾフの兄弟』のなかで、イワン・カラマーゾフが問うた、「苦しみによって永遠の調和をあがなうためにすべての人が苦しまなければならないとしても、なんだって子供もそこに入らなければならないのか」(D. vol. 14, 222)、という言葉に集約される問題である。²⁴昭和 10 年前後の日本の場合、「歴史の必然」の問題とは、当時、マルクス主義が知識人、学生に大きな影響力を持ったことを背景に、とくに、マルクス主義的な「歴史の必然」と個人の実存の問題として現れてくる。阿部六郎もこの問題と無縁ではなかった。

²² 根岸淳一、前掲書、147 頁。

²³ 英訳は少し遅れて 1936 年。

²⁴ ロシア思想史におけるイワン・カラマーゾフ問題については、松原広志『ロシア・インテルゲンツィヤ史—イヴァーノフ＝ラズムニクと「カラマーゾフの問い」』、ミネルヴァ書房、1989、参照。

河上徹太郎との共訳や、中原中也、大岡昇平らとの交友などから一般に『文学界』系の人物の印象がある阿部だが、彼には京都帝国大学卒業直後の1927年から1928年にかけて社会主義思想に共鳴し、シンパとしてプロレタリア文学運動にたずさわった時期があった。1929年には運動から身を引いたが、この間密かな転向を経たようで、そのさい問題になったのが、歴史の進歩の必然性と個人の実存の乖離、自由の問題だった。唯物史観の正当性を認めながら、なお個人の役割が存在し、自由が必要であることを、阿部は1927年5月の私信のなかで次のように述べている。

物の定めた歴史的必然といふだけならば、それだけの問題ならば、ただ、吾々は歴史に引づられて行く他に仕方がない、(中略)。物の重圧が多数者の生命を機械にし、石にし、歪め虐げてゐる組織は変革されなければならない、この変革が観念論的説教によつて実現されがたいことは、生産関係の変革によらなければならないことは、私も、もう殆ど疑つてゐない。たゞ、かうして物の歪んだ関係から開放された心が、全体において描く形は、強制的平面であるか、自由な立体であるか、私は、過程としては、偶然的な平面が強制される傾向があるとしても究竟、必然的な立体に向つて進まなければならないと信じてゐる。²⁵

また、中野重治や鹿地亘、森山啓などとも交流し、『プロレタリア芸術』に寄稿していた1928年3月、自己を生かそうという気持から、運動に全身的に飛び込んでいけない心境を、「人類社会の現段階を打開していく運動に力を併せると一緒に、人間心理の奥底から掴みとつた声を響かして死にたいと思ふ。この我執のために、階級に身を捧げる爽やかな決意に投ずることから、俺の足は鈍つてゐる」、と語っている。²⁶マルクス主義に影響された当時の青年の多くが抱いた心境だったが、阿部はこの「我執」と誠実に向きあいながら、勝又浩の指摘するように「自己のこうした資質を最後まで失わず、そこに固執しつづけること」によつて、²⁷歴史と実存の問題意識を深めていったのだった。

その後、中原中也の影響などもあって内的転向を遂げた1929年、彼は唯物弁証法における歴史の必然について、さらに次のように書いている。

この思想(唯物弁証法を指す一訳者註)は車輪のやうにも見える。この車輪は、下転して地を打つことによつて巻き上がつて進転するが故に、進転しつつ絶えず地を噛むが故に、単なるドンキホーテ的存在ではない。この思想は又浚渫船であるかのやうにも見える。浚渫船は陰湿なる川底の泥濘を地上に引上げるが故に、太陽を愛することによつて自ら動くが故に、決してハムレット的存在といふことはできない。しかも、車輪の廻転して行く果の光明の性質については殆んど省察が措かれてゐる点で、それは未だ全くドンキホーテの脈を離れ得てはゐない。²⁸

『白痴』のイポリットが語った何物も捕らえて放さぬ巨大な機械のような自然、そして『地下室の手記』の二二が四の世界、あの「壁」に通じるイメージで歴史が語られていて、『地下室の手記』が提起した問題を阿部が自らの運動の体験を通して理解していたことがうかがえる。彼はこの「没落について」

²⁵勝又浩「阿部六郎とプロ芸」、『国文学踏査』第13号、1984、69頁。この時期の阿部六郎に関してはもっぱら同論文、および勝又浩「阿部六郎の役割り」、『法政大学文学部紀要』第15号、1969、に負っている。

²⁶同上、71頁

²⁷同上、70頁。

²⁸「没落について」、『阿部六郎全集』第1巻、一穂社、1987、105—6頁。

のなかで同時に、「レオ・シュエストフの強調するドストエフスキイの「地下室」への転落」、²⁹とすでに『悲劇の哲学』を読んでいたことを示す一文を書いている。「没落」とは当時革命運動から脱落することを意味する言葉であったが、阿部が『悲劇の哲学』にいち早く注目したのも、シュエストフの言う信念の更生、「地下室」への転落の問題が、歴史の必然を認めながら我執にとらわれ、革命運動に逡巡して運動から離れていったかつての自分の姿と二重写しになっていたからだった。本多秋五は、「シュエストフの翻訳者や受容的評論家よりも、転向文学者のシュエストフ理解はより痛切であり、より深くシュエストフの真髓にふれてきたと信じる」、と述べている。³⁰だが、阿部自身が転向文学者だったのであり、歴史の必然と個人の自由の乖離に悩みシュエストフに出会った点では、いわゆる戦後文学者たちの先行者だったのである。おそらく阿部は戦後、椎名麟三や平野謙らが提出した問題が、かつての自分の苦しんだ問題の反復であることを認識していたはずである。しかし、かれは自分の密かな転向体験について沈黙を守ったのだった。

また、阿部はドストエフスキイの宗教的な側面にも敏感だった。『悲劇の哲学』と同年の「シュエストフの思想」（『文藝』1934年12月号）で、彼は「だから彼（シュエストフを指す—引用者）の釈義するドストエフスキイの『地下室』は二重の相を呈する。それは美と崇高などの影は微塵も残らず剥奪された陰惨醜悪な餓鬼非人の巢であると同時に、宏大無法の神の領域への入口である。（中略）このどんづまりの現実の瞬間は終末であると同時に端緒である」と述べている。³¹『地下室の手記』の背後にあった宗教性を的確につかんだ言葉で、この点は戦後の単行本『ドストエフスキイ』（1949）にもよく現れている。マルクス主義からの転向を経て最後にキリスト者として終わった点でも、阿部は日本のドストエフスキイ受容者の一つの典型を示す人物だった。

一方、『悲劇の哲学』のもう一人の共訳者河上徹太郎も、昭和におけるドストエフスキイ読解の革新に貢献した文学者だった。彼は1930年の「自然人と純粹人」で早くもシュエストフに言及し、翌年の「ドストエフスキイとジッド」で『地下室の手記』について、「それは彼（主人公—引用者）が自ら説明してゐるやうに、愚劣の告白であらうか？ 正反対だ。これは純情無垢な、己が感覚を生れて初めて発見した悦びのときの声だ。これはヴェルレーヌの詩集「叡智」と共に十九世紀の代表的改宗告白書である」、³²とこの作品の根底にあった宗教性をよく理解した言葉を残している。マルクス主義や左翼運動に同調することのなかった河上は、シュエストフとの関連で「歴史の必然」と個人の実存をめぐる葛藤に直接ふれることはなかった。彼自身はのちに、現代で神の存在を力強い言葉で教えるのは不信心者のほうで、この点に自分のシュエストフへの信服の鍵があったと述べて、³³シュエストフへの関心が信仰の問題にあったことを明かしている。

しかし、河上肇の親族でもあった彼は、阿部六郎のかかえた問題や『悲劇の哲学』出版当時話題となっていた転向の問題に無関心だったわけではなかった。『悲劇の哲学』が出版されたのと同じ1934年、転向作家と唯物論の関係を論じて、一つの科学主義である唯物論の過酷さを言い、「この冷酷な思想は、その本来の機能を発揮して人間の内に冷酷な法則を打ち建て、彼等に新しい制度を齎す代りに、自分自ら冷酷な法則と化した。唯物論は恰もキリスト以前のエホバの神の如き嫉妬の神となった。人々は自我、

²⁹同上、106頁。

³⁰『物語戦後文学史』、新潮社、1966、773頁

³¹『阿部六郎全集』第1巻、296頁。

³²『河上徹太郎全集』第1巻、勁草書房、1969、25頁。なお、この論文で河上は直接『悲劇の哲学』の名に言及している。

³³「シュエストフ的不安」（1953）、『河上徹太郎全集』第2巻、勁草書房、1969、249頁。

道徳、芸術、その他諸々の犠牲をこの神に捧げた」と、³⁴この思想への献身に宗教的な帰依に似た性格のあったことを指摘している。そして、この万能の思想との相克と離反から生まれる転向作家の自意識の劇を、「近頃生々しい事件」と評した。³⁵河上はまた同じ年の『虚無よりの創造』跋でも、「実証主義的唯物論の冷酷な宿命は、幸か不幸か、日本には全然経験がない所である」、³⁶と『地下室の手記』の主人公がぶつかり、シェストフが生涯闘った西欧近代合理主義の「壁」の問題が、日本ではまだ十分切実なものとして理解されていないと述べた。転向者の唯物論に対する宗教的帰依も、その無理解から生まれたものと見ていたのである。阿部六郎の直面した問題の性格を含めて、当時の転向文学者とマルクス主義思想の関係を的確に捉えた一文で、その「生々しい事件」を見る視線の背後には、宗教的な回心や棄教の問題への関心があったのだった。

1934-5年のシェストフ論争当時のシェストフ(1866-1938)は、パリのスラヴ研究所でロシア哲学を担当し、「ドストエフスキイとキルケゴール」を講じていた。そのころ彼がもっぱら読んでいたのはキルケゴール、ルター、プラトン、ニーチェらで、ルターや原罪の問題が大きく意識されていた。彼自身は「自明なもの」との闘いが自分の一生の課題だと述べているが、晩年はヒンズー思想などにも深く沈潜し、最後まで神を語るシェストフが記録されている。³⁷この点、『悲劇の哲学』の背後に信仰の問題を見てとった阿部六郎や河上徹太郎の読み方は、当を得たものだったといえよう。こうしたシェストフの生涯と思想については、当時も彼の主要な著作の多くが翻訳された今日においても日本ではあまり知られておらず、その点いまだほとんどシェストフ論争当時の状態に止まっている。

³⁴ 「転向作家と思想の問題」、『河上徹太郎全集』第1巻、136-137頁。

³⁵ 同上、137頁。

³⁶ 平野謙、小田切秀雄、山本健吉編『現代日本文学論争史』下巻、勁草書房、1975、36頁。

³⁷ Benjamin Fondane, *Rencontres avec Léon Chestov*, Paris, 1982, pp.76,107,159,165.

シェストフの晩年の生活と思想については、同書および次の著作による。

Н.Баранова-Шестова, *Жизнь Льва Шестова*, т. II, Париж, 1983.